

宮城教育大学機関リポジトリ

# 幼児期の道徳発達に関する保育者と小学校教諭の認識

著者	越中 康治
雑誌名	宮城教育大学情報処理センター研究紀要 : COMMUE
号	23
ページ	33-36
発行年	2016-03-31
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1138/00000545/">http://id.nii.ac.jp/1138/00000545/</a>



# 幼児期の道德発達に関する保育者と小学校教諭の認識

越中康治

宮城教育大学 教育学部 学校教育講座

本研究の目的は、幼児期の道德発達について、保育者(保育士及び幼稚園教諭)と小学校教諭の認識を比較検討することであった。保育者と小学校教諭を対象に質問紙調査を行い、権威主義的伝統主義尺度への回答を求めるとともに、幼児期の道德発達に関するイメージの各項目について、幼稚園や保育所(園)の年長児(5歳児)にどの程度あてはまると思うかを尋ねた。その結果、保育者は、小学校教諭に比して、年長児は自分のことは自分ですることができ、自分の気持ちを抑えて、我慢することができるというイメージしていた。他方、小学校教諭は、保育者に比して、年長児ではやって良いことと悪いことの区別は難しく、大人が正しいと言えれば何でも正しいと判断するとイメージしていた。また、権威主義的伝統主義傾向の強い保育者・教師ほど、年長児はやって良いことと悪いことの区別は難しいとイメージする傾向にあった。本研究では、幼児の道德的自律を認めるか否かについて、パーソナリティよりむしろ校風の影響が見出された。

キーワード: 幼児期、道德発達観、保育者、小学校教諭、道德的自律

## 1. 問題と目的

平成 20(2008)年の保育所保育指針、幼稚園教育要領及び小学校学習指導要領の改定・改訂以降、幼保小の連携がこれまで以上に強調されるようになった。こうした流れの中で、幼児・児童の交流、公開保育・公開授業、合同研修会・講演会、情報交換・保育参観・授業参観などの幼保小連携活動が多くなされるようになった。しかし、保育・教育の現場が多忙を極める中、幼保小の連携といっても実際には年に1、2回のイベント的な交流が多く[1]、全国各地で行われている幼小一貫教育の実践なども多くが交流活動の事例報告であり、交流活動が自己目的化してしまっている[2]との指摘もなされている。連携によって教職員同士の交流などは図られつつあるものの、双方の指導観や子ども観の違いを理解するまでには至っておらず[1]、この点が課題として残されている。

幼保小の間の認識の違いについては、これまでも様々に指摘がなされてきた[3]。例えば、山崎他[4]は、幼稚園教諭と小学校教諭のそれぞれに、幼稚園と小学校の教育において育てるべき内容を尋ね、認識の違いを検討している。その結果、幼稚園教育におい

て育てるべき内容では、幼稚園教諭が「感動・豊かな心」などの情緒的・感情的側面を重視するのに対して、小学校教諭は基本的生活習慣やルール・規則の遵守などを重視する傾向にあることが示された。他方、小学校教育において育てるべき内容について、幼稚園教諭は「個性・自分らしさ」を重視するのに対して、小学校教諭はこの点をあまり重視しないという違いが示された。

また、中川他[5]は、保育士、幼稚園教諭及び小学校教諭の学級経営観を比較検討し、前者が心情重視で受容的であるのに対して、後者が規範重視で指導的であることを指摘した。野口他[6]は、「子ども中心」や「教師中心」などの語に対するイメージの比較から、幼稚園教諭が子どもの主体性や自発性を重視するのに対して、小学校教諭は教師側の指導や方向付けを重視するなど異なる観点を持っていることを指摘した。

さらに、越中他[7]は、道德指導観に焦点をあて、保育者と小学校教諭との認識の差異を検討した。「道德性や規範意識の芽生えを培う上で幼児期にどのような指導・配慮が必要か」と尋ね、テキストマイニングによる分析を行った結果、小学校教諭では「きち

んと」「しっかり」「～させる」などの語が頻出した。小学校教諭では、「幼児期からルールやきまりをきちんと守らせる、しっかり意識させる」など、教育の目標や指導内容を重視した記述が特徴的であった。他方、保育者では、「見る」「聞く」「思い」「気持ち」「理解」などの語が頻出した。保育者では、「子どもの様子を見て、話を聞き、思いや気持ちを理解する」など、子どもに寄り添うことを重視した記述が特徴的であった。

もちろん、ひとくちに保育者・教師といっても一人ひとりの認識は多様であるが、道徳指導観に関しては校園種によるそれぞれの特徴が認められる。そして、こうした違いが認められる背景には、道徳発達観あるいは道徳発達に対するイメージの相違があるものと推察される。例えば、幼児期から児童期にかけての道徳発達を他律的にとらえるのか、幼児の中にも自律の芽生えを認めるのかといったことなどは、子どものかかわりにも大きな影響を及ぼすと考えられる[3]。保育者と小学校教諭とでは、こうした道徳発達のとらえ方においても違いが認められるのであろうか。

本研究では、この点を探るために、保育者(保育士・幼稚園教諭)と小学校教諭を対象として質問紙調査を実施する。幼稚園・保育所から小学校への接続期にある年長児(5歳児)の道徳発達に関するイメージを尋ね、校園種による違いを検討する。加えて、本研究では、道徳発達に関するイメージに影響を及ぼす可能性がある要因として、校園種以外に権威主義的伝統主義を取り上げる。校園種やパーソナリティによって、道徳発達に関するイメージが異なるのかを探索的に検討する。

## 2. 方法

### 2.1 調査時期、対象者及び手続き

2011年に宮城県内で開催された講習会に参加した教師・保育者105名を対象に質問紙調査を行った。このうち、回答に不備のあった3名は分析対象から除

外した。最終的な分析対象者102名の内訳は、公立小学校教諭(以下、小学校教諭)44名(平均保育・教育歴16.89年、 $SD=9.16$ 、レンジ=30、男性12名、女性32名)、公立幼稚園・保育所・認定こども園の保育士・教諭(以下、公立保育者)32名(平均保育・教育歴18.22年、 $SD=9.91$ 、レンジ=36、男性4名、女性28名)、私立幼稚園教諭(以下、私立保育者)26名(平均保育・教育歴11.65年、 $SD=5.34$ 、レンジ=17、男性1名、女性25名)であった。

なお、調査は無記名式で実施した。また、実施にあたっては、本調査が講習の評価等とは一切無関係であること、調査用紙の提出を強制するものではないことを予め伝えた。

### 2.2 調査内容

所属(校園種)、性別、保育・教育歴等を尋ねた上で、後述する①権威主義的伝統主義尺度と②幼児期の道徳発達に関するイメージについて回答を求めた。①と②はいずれも、6件法(とてもよくあてはまる:6点、あてはまる:5点、ややあてはまる:4点、あまりあてはまらない:3点、あてはまらない:2点、全くあてはまらない:1点)により回答を求めた。

①権威主義的伝統主義尺度 敷島他[8]の権威主義的伝統主義尺度5項目(「伝統習慣にしたがったやり方をとるべきだ」「先祖代々と同じやり方をとるべきだ」「よい指導者は下のものに対して厳格であるべきだ」「権威ある人には常に敬意をはらうべきだ」「子どもは両親に対して絶対服従すべきである」)を用いた。「以下の各項目の内容は、先生のお考えにどの程度あてはまりますか」と尋ねた。

②幼児期の道徳発達に関するイメージ 越中・白石[9]の幼児期の道徳発達に関するイメージ6項目(表1)を用いた。「以下の各項目の内容は、先生の幼稚園や保育所(園)の年長児(5歳児)についてのイメージにどの程度あてはまりますか」と尋ねた。

### 3. 結果

#### 3.1 権威主義的伝統主義による群わけ

権威主義的伝統主義尺度 5 項目の合計の中央値 (16 点) を基準として、16 点以上を高群、16 点未満を低群に折半した。なお、5 項目の合計の平均は小学校教諭で 15.64 ( $SD=3.78$ )、公立保育者で 15.28 ( $SD=3.32$ )、私立保育者で 15.85 ( $SD=2.40$ ) であった。また、権威主義的伝統主義得点について、校園種によって違いが認められるかを検討するために 1 要因分散分析を行ったが、有意な差は見られなかった ( $F(2, 99) = 0.21, n.s.$ )。

#### 3.2 道徳発達に関するイメージ得点の分散分析

道徳発達に関するイメージの各得点 (①～⑥) について、3 (校園種: 小学校教諭、公立保育者、私立保育者)  $\times$  2 (権威主義的伝統主義: 高群、低群) の 2 要因分散分析を行った (表 1)。その結果、全 6 項目中 4 項目において、校園種の主効果が有意であった。保育者は、小学校教諭に比して、年長児は①自分のことは自分であることができ、⑤自分の気持ちを抑えて、我慢することができるというイメージしていた。他方、小学校教諭は、保育者に比して、年長児では④やっ

て良いことと悪いことの区別は難しく、③大人が正しいと言える何でも正しいと判断するとイメージしていた。

なお、項目④については、権威主義的伝統主義の主効果に有意傾向が見られた。権威主義的伝統主義傾向の強い保育者・教師ほど、年長児はやって良いことと悪いことの区別は難しいとイメージする傾向にあった。

### 4. 考察

本研究の目的は、幼児期の道徳性に関する保育者 (保育士及び幼稚園教諭) と小学校教諭の認識を比較検討することであった。保育者と小学校教諭を対象に質問紙調査を行い、権威主義的伝統主義尺度への回答を求めるとともに、幼児期の道徳発達に関するイメージの各項目について、幼稚園や保育所 (園) の年長児 (5 歳児) にどの程度あてはまると思うかを尋ねた。

結果として、保育者は公立・私立ともに、小学校教諭に比して、年長児における道徳的自律を認める傾向にあることが示された。保育者は、年長児は自分のことは自分であることができ、自分の気持ちを抑えて、我慢することができるというイメージする傾向にあることが

表1 各項目の平均値 (標準偏差) と2要因分散分析結果 (校園種  $\times$  権威主義的伝統主義)

	小学校教諭		公立保育者		私立保育者		F 値 (自由度)		
	高群 (n=25)	低群 (n=19)	高群 (n=16)	低群 (n=16)	高群 (n=14)	低群 (n=12)	校園種 (2, 96)	権威主義 (1, 96)	交互作用 (2, 96)
①自分のことは自分であることができる	4.00 (0.75)	4.26 (0.64)	5.06 (0.56)	4.88 (0.60)	5.29 (0.45)	5.00 (0.58)	23.05*** 公・私 > 小	0.29	1.69
②相手の立場や気持ちを理解することは難しい	3.76 (0.91)	3.68 (0.86)	3.38 (0.78)	3.14 (1.11)	3.43 (0.90)	3.00 (0.91)	2.90†	1.71	0.28
③大人が正しいと言えば何でも正しいと判断する	3.88 (0.71)	4.00 (0.92)	3.75 (1.15)	3.56 (0.93)	3.57 (0.98)	3.00 (1.08)	3.66* 小 > 私	1.16	1.02
④やって良いことと悪いことの区別は難しい	3.68 (0.88)	3.21 (0.95)	2.69 (0.68)	2.75 (1.09)	3.07 (1.03)	2.42 (0.64)	6.35** 小 > 公・私	3.51† 高 > 低	1.29
⑤自分の気持ちを抑えて、我慢することができる	3.72 (0.72)	3.74 (0.91)	4.00 (0.79)	4.31 (0.68)	4.07 (0.88)	4.50 (0.65)	4.24* 公・私 > 小	2.39	0.56
⑥みんなのために進んで働き役立とうとする	4.24 (0.81)	4.32 (0.80)	4.25 (0.90)	4.25 (0.97)	4.50 (0.63)	4.58 (0.76)	1.16	0.09	0.02

注) 多重比較にはRyan法 ( $p < .05$ ) を用いた。

† $p < .10$ , \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

示された。他方、小学校教諭は、保育者に比して、年長児ではやって良いことと悪いことの区別は難しく、大人が正しいと言えば何でも正しいと判断するとイメージする傾向にあることが示された。

この結果について、保育者が日頃接しているより幼い子どもたちと比較して年長児を高く見積もったのに対して、小学校教諭はより年長の児童と比較して年長児を低く見積もったという側面もあると思われる。しかしながら、年長児(5歳児)の一般的なイメージを尋ねているにもかかわらずこうした差が認められるということは、保育者と小学校教諭との間には、発達観、あるいは道徳発達に関するイメージについて、少なからぬ差異があるものと考えられる。

また、本研究では、幼児の道徳的自律を認めるか否かについて、パーソナリティよりむしろ校種の影響が見出された。しかしながら、権威主義的伝統主義傾向の強い保育者・教師ほど、年長児はやって良いことと悪いことの区別は難しいとイメージする傾向も認められた。先述の通り、同じ保育者・教師であっても認識は多様であることから、今後は、こうした発達観に影響を及ぼす要因についてより詳細な検討を行う必要がある。

## 5. 付記

本研究は日本保育学会第 67 回大会において発表した内容を加筆・修正したものである。本研究は JSPS 科研費 15K17263 の助成を受けた。

## 6. 引用文献

- [1] 松寄洋子: 幼稚園・保育所と小学校の連携, 無藤 隆・清水益治(編), 新 保育ライブラリ 子どもを知る 保育心理学, 北大路書房, pp. 142-150 (2009).
- [2] 助川晃洋, 藤森智子, 平野 崇, 後藤和之: 幼稚園と小学校における「善悪の判断」と「勇気」を主題とした道徳教育実践—子どもに積極的な自己像の形成を促す幼小一貫教育の実現に向けて—, 宮崎大学教育文化学部紀要教育科学, vol. 29, pp. 75-91 (2013).
- [3] 越中康治: 幼保小連携とモラル, 有光興記, 藤澤 文(編), モラルの心理学—理論・研究・道徳教育の実践—, 北大路書房, pp. 143-153 (2015).
- [4] 山崎 晃, 若林紀乃, 越中康治, 小津草太郎, 米神博子, 松本信吾, 林よし恵, 三宅瑞穂: 教育課程編成のあり方(II)—幼小一貫教育課程編成を阻害する要因の検討—, 広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要, vol. 34, pp. 189-196 (2005).
- [5] 中川智之, 西山 修, 高橋敏之: 幼保小の円滑な接続を支援する学級経営観尺度の開発, 乳幼児教育学研究, vol. 18, pp. 1-10 (2009).
- [6] 野口隆子, 鈴木正敏, 門田理世, 芦田 宏, 秋田喜代美, 小田 豊: 教師の語りに用いられる語のイメージに関する研究—幼稚園・小学校比較による分析—, 教育心理学研究, vol. 55 (4), pp. 457-468 (2007).
- [7] 越中康治, 小津草太郎, 白石敏行: 保育士及び幼稚園教諭と小学校教諭の道徳指導観に関する予備的検討, 宮城教育大学紀要, vol. 46, pp. 203-211 (2011).
- [8] 敷島千鶴, 安藤寿康, 山形伸二, 尾崎幸謙, 高橋雄介, 野中浩一: 権威主義的伝統主義の家族内伝達—遺伝か文化伝達か—, 理論と方法, vol. 23 (2), pp. 105-126 (2008).
- [9] 越中康治, 白石敏行: 幼児教育学生の道徳発達観に関する予備的検討, 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, vol. 28, pp. 1-8 (2009).